

〈史料紹介〉

# アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著 『高貴なる用語の解説』 訳注 (14)

谷 口 淳 一 編

## はじめに

本稿は、アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー (Aḥmad Ibn Faḍl Allāh al-‘Umārī) 著『高貴なる用語の解説』(*al-Ta‘rīf bi-al-muṣṭalaḥ al-šarīf* 以下『高貴なる用語』と略) のアラビア語原典からの日本語訳注である。本稿では、al-Droubi の校訂本307頁7行目から323頁12行目までのテキストに対する訳注を掲載する。著者および本書などに関しては、訳注(1)の「はじめに」を参照されたい。

今回訳出した部分は、第7章第1節の第3項から第7項に相当する。この章は「書簡の中でよく述べられる、用いるべき形容辞」と題され、修辞に満ちた押韻散文の例が、対象となる事物ごとに示されている。訳注(13)の「はじめに」で述べたように、これらの文例と類似した文や句は、マムルーク朝政府が発行する様々な文書に織り込まれた。

各種道具に関する文例を集めた第1節のうち、本稿の最初に当たる第3項「王にまつわる品々」には、スルターンの権威と関わりのある19点の物品を表現した文例が収められている。まず「王座」「腰帯」「指輪」「巾」「革袋」といったスルターンが直接用いたり身につけたりしたと思われるものが取り上げられている。続いて「ペン」と「インク壺」、そして筆記後に紙から余分なインクを取り除くための砂を入れる「砂壺」を表した文章が並んでいる。ウマリーの半世紀後にマムルーク朝の書記を務めたカルカシャンディーは、これら3点は書記の道具 (*ālāt al-kuttāb*) とする方が適切であるとして、ウマリーの分類方法に異を唱えている [*Ṣubḥ*, v. 2: 135]。ウマリーは、これらの筆記具を「王にまつわる品々」に含めた理由を明記していない。しかし、ペンとインク壺の描写例としてウマリーが選んだ文章は、スルターンの命令を各地へ伝える文書を作成するためのペンとインクこそが、スルターンの権力行使に不可欠な道具であるということを示す内容となっている。ウマリーは、筆記具のこのような側面を重視して、ペンなど3点の文具を王にまつわる品々に加えたのであろう。

その後には、「鞍と頭絡」「ラクダ用鞍と勒」「鞭」という馬またはラクダに騎乗する際に用いる道具が言及され、さらに「旗、軍旗」「日傘、傘蓋」「太鼓」「喇叭」「スルナーイ、縦笛」「羈、首覆い」「馬衣」が続く。そして最後に、道具ではないものの、スルターンの行進を飾る存在として「二頭揃いの馬」を表現した文例が示されている。このように、ウマリーが「王にまつわる品々」として挙げた品目には、騎乗し行進する際に用いられるものが目立つ。騎士が権力を握るマムルーク朝ならではの傾向と言えるだろう。

第4項には12種類に及ぶ「旅の道具」を表現した文例が収められている。まず、貴人が乗り込みラクダなどによって運ばれる「輿」と「マフミル」が取り上げられ、旅の途上で休息するための「天幕」と「ハルガーフ」が続く。その後に「飲料水用革袋」「駄獣用の水桶」という飲料水に関する道具、「大鉢」「料理鍋」という食事に関わる道具の文例が並び、最後に、火と灯りに関係する「篝火」「鼎石」「松明の光」「一对のランタン」を書き表した四つの文例が置かれている。乾燥した土地を駄獣に乗って夜に移動するという当時のアラブ地域における典型的な旅にまつわる品々が、多彩な比喩を用いて表現されている。

第5項では、「狩りの道具」として「罨」「網」「吹き矢」「釣り針」の4点を取り上げられている。陸上の動物に加えて、鳥と魚の狩りに用いる道具が描写されている。次の第6項には「商取引の道具」の文例として、「天秤」「枱」「物差し」「はさみ」を表現した文章が記されている。重量、容量、長さを計る道具3種に加えて、「はさみ」が「商取引の道具」とされている。商品を正確に切り分けるために必要な道具ということであろう。今回公刊分の最後にあたる第7項には「楽器」の文例が集められている。「タンバリン」に始まり、笛の一種である「シャッバーバ」、そして弦楽器の「ウード」「ラバーブ」「トゥンブール」「ジャンク」の計6種類の楽器が、比喩や掛詞を駆使して描写されている。

これらの文例の多くには、詩やクルアーンなどの一節が織り込まれているが、原文そのままの形での引用は少なく、語順や一部の語句が変更されている場合が多い。引用元は重要と思われるものに限って注記した。より細かい原典情報については、al-Droubi 1992を参照されたい[研究篇：286-292頁]。訳文中にある〔 〕は、校訂本およびその底本であるL写本の頁表示と、校訂本に無い語句を補って訳した場合に用いた。また、用語の原語をローマ字で表記する際には、原則として辞書の見出しとなる形（アラビア語の名詞と形容詞は単数形主格、動詞は完了形3人称男性単数）に直して示した。ただし、章題などの表示、単数形にすると意味が変わってしまう語句などは、原文の形に即して転写した。

我々は、2003年7月から「イスラーム世界における書記とその伝統研究会」と称して、1年間に10回程度の研究例会（輪読会）を開催し、『高貴なる用語』を読み進めてきた。今回の公刊部分は、2022年4月から2023年5月にかけて実施した計13回の例会（第199回～第211回）で読んだ部分に相当する。この期間の研究例会で訳注作成を担当したのは、伊藤隆郎、岡本恵、近藤真美、杉山雅樹、清水和裕、辻大地、森山央朗、柳谷あゆみ、横内吾郎（五十音順）と谷口の10名であるが、さらに篠田知暁が編集作業に携わった。訳語や表記の統一と最終的な調整および「はじめに」の執筆は谷口が担当した。

我々の研究会は、2018年度から2022年度まで科学研究費助成事業基盤研究（B）（一般）「13-15世紀におけるアラビア語文化圏再編の文献学的研究」（代表者佐藤健太郎、課題番号18H00719）の一研究班として活動しており、本稿はその研究成果の一部でもある。

## 『高貴なる用語の解説』(14)

アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー

[txt. 307; ms. 133a]

第3項 王にまつわる品々<sup>1)</sup>王座<sup>2)</sup>

彼の王権に対して合意が結ばれ、彼の糸で会合〔の真珠〕が整然と並べられた。扉 (ritāğ) が開かれ、彼は王座の上に落ち着いた。彼は王座と王冠の飾りとなった。彼が与えるものの一部でさえ玉座 (sarīr) を覆っている金<sup>3)</sup>より偉大であり、玉座を縁取りしている<sup>4)</sup>絹より栄光に満ちた者 (王) が、玉座についている。王によってその木<sup>5)</sup>の位階は高められ、その木は緑〔に覆われた〕若枝の頃に戻らないことを望んだ。フェリードゥーン<sup>6)</sup>の王座はこの王座よりも劣り、ビルキース<sup>7)</sup>の高御座 (‘arš) は〔自身が〕この王座になることを望んだ<sup>8)</sup>。それほどに位階の高い王座<sup>9)</sup>はなく、その王座ほど幸運を与えられたものもないからである。

腰帯<sup>10)</sup>

彼は金の腰帯を授かった。彼はそれによって自身の腰を締め上げ、力を強める。肩の下で美しい革紐 (‘ilāqa) をそれに付けて、その帯を授かった者 (mun‘am) の許では [ms. 133b] それに対する愛着 (‘alāqa) が語られ続ける。腰のくびれ (ḥaṣr) はその腰帯によって飾られた。腰帯は素晴らしい衣服を求めた。[txt. 308] 上から腰帯が巻き付くせいで、その衣服

1) al-ālāt al-mulūkīya.

2) al-taḥt.

3) カルカシャンディーは、ファールスの王たちが有した玉座の特徴の一つとして、金で覆われていることを挙げている [Subh, v. 2: 133]。

4) 校訂テキストでは ḥullila としているが、S1写本 [f. 200a] およびバイルート版 [273頁] に従って ḡullila と読む。

5) ‘ūd. ここでいう「その木」とは、王座に加工された木材のことである。

6) Afrīdūn. 古代イランの伝説的な王の一人。『王書』では、ピーシュダーディー朝の王ジャムシードの血を引く Abtiyān (または Ābtīn) の息子。父が暴君ザッハークによって殺害された後、鍛冶屋のカーヴェの助力を得て、ザッハークの打倒に成功した。その後、イーラーンの王となり、その統治期間は500年にわたったとされる [“Farīdūn,” EI2; “Ferēdūn,” EI1r]。訳注(9) 34頁注79も参照。

7) Bilqīs. アラブ文学において「シバの女王」として知られる。名前は明記されないものの『クルアーン』にも登場し、彼女がソロモンに服従することになった逸話が語られている [“Bilqīs,” EI2]。

8) 『クルアーン』27章15-44節の逸話を踏まえた表現か。ただし、その逸話は、ソロモンが配下のジンに命じて、ビルキースの高御座を持ってこさせ、その外見を変えて彼女が気付くかどうか試したというもので、本文の内容と合致しているわけではない。

9) 校訂テキストでは taḥt としているが、L写本およびバイルート版 [273頁] に従って taḥt と読む。

10) al-mintaqa. Dozyによれば、金や銀で作られた腰帯を指し、革や布でできたものをこの名称で呼ぶ例は確認できないという [Dozy 1845: 420-421]。

は目立たなくなってしまうというのに。かの飾り帯 (wišāḥ) は腰のくびれを締め上げた。帯を飾る金は言った。「私は〔その美しさを〕見るができないのに、どれくらい巻き付かねばならないのか」と。

### 指輪<sup>11)</sup>

彼は自らの手で安全を保証する指輪<sup>12)</sup>を受け取り、宝石 (‘asḡad) で封緘していたものを〔その指輪で〕封緘した。あたかも、彼がそれによって昴から、その手が自身の指先〔を飾る〕ために保管していたものを奪い取ったかのようにであった。そして、けたたましい (mula‘la‘) 太陽の舌が、それを自身の説明の封印 (ḥātim) としたかのようにであった。

### 巾<sup>13)</sup>

彼は、安全を保証する巾<sup>14)</sup>、十分に安全を保証するものを、スルターン<sup>15)</sup>から受け取った。それは、腰帯のように、解けないように腰に付けられる<sup>16)</sup>。その巾によって普段通り平穩に駿馬が走り、その巾の後は再び巾を取ることなく、ただ駿馬のたてがみに触れるのみと、スルターンはその巾を手を受け取った者に吉報を告げた。

### 革袋<sup>17)</sup>

革袋は、実を包むもの、下に月の輝く天を覆うもの、枝葉茂れる大樹、濁ったものも清らかなものも〔見出される〕池。それは、夜という革から切り出され、昴に掛けられ、スハイル星によって叩かれた<sup>18)</sup>が如し。

### ペン<sup>19)</sup>

彼のペンは跪く剣に仕えられ、槍はペンと競って悔しさに歯嚙みする。[txt. 309] その黒き睫毛は瞼に守られ、それは客人を寛大にもてなす<sup>20)</sup>。[ペンが紙を] 擦る音で〔敵を〕脅か

11) al-ḥātam.

12) ḥātam al-amān. 安全を保証することを示すために与えられる指輪 [Subḥ, v. 2: 132; ベイルート版: 274頁注2]。

13) al-mandīl.

14) mandīl al-amān. 指輪と同じく、相手に与えることによって安全を保証することを意味した [Subḥ, v. 2: 132; ベイルート版: 274頁注2]。

15) 原文では「彼」と記されているのみであるが、記述内容から、スルターンを指すものとして訳出した。

16) 原文は, yaṣuddu al-waṣṭa fa-lā yanḥallu wa-yaqūmu maqāma al-mintaqati fī al-maḥalli. しながら, カルカシャンデーは, 腰に巻くのではなく, 腰帯につけるものとして巾を説明している [Subḥ, v. 2: 132]。それを踏まえると, この部分は, 「解けないように, 腰帯のしかるべきところで腰にしっかりとつけられる」とも訳出できるか。

17) al-ḥuramdān. 小物, 紙, 貨幣などを入れて持ち運ぶ革袋。ペルシア語の ḥuramdān に由来する語 [Dozy, v. 1: 279]。

18) 南の低空を東から西へ移動するスハイル星 (カノープス) が, 天空の高い位置に現れる昴に掛けられた革を叩いて鞣しているイメージであろうか。

19) al-qalam.

20) 黒き睫毛がインクのついたペン, 瞼が筆箱の喩えか。ペンが客人をもてなすというのは, 相手をもてなすような文章を書くことを示していると思われる。

し、唸る黒きもの<sup>21)</sup>から〔書き〕写す。ペンの軌跡が短くなり<sup>22)</sup>、ペン先を削る者<sup>23)</sup>は、ペんに名誉を与えるが故に敬虔なる者の一人に数えられた。〔ms. 134a〕

#### インク壺<sup>24)</sup>

ペンという釣瓶繩 (rišāʿ) がインク壺という井戸から常に水を引き、インク壺は黒き染料でその白髪の色を覆う。糧の湧き出るところにして、便益の場。星と月に満ちた夜そのものにして、実をつけたアカシア<sup>25)</sup>の生える場所。鷺の翼<sup>26)</sup>のごときものを身にまとい (taraddā), 敵を追い返し、親しい者たちの手で障壁を築いた。

彼にインク壺が捧げ持たれた。それは、荣誉ある位階 (rutbat al-tašrīf), 委任 (tašrīf) の道具。あらゆる土地に雲を届け、あらゆる大樹に鳩を送る地平。インク壺のペンは〔あらゆる〕地方への裁定を含み、インク壺という暁闇から意味という朝が明ける。糧はインク壺という湧き出口より湧き出でて、ペンより来たるものが一指分〔の増水量〕でも、ナイル川<sup>27)</sup>の助けは称えられる<sup>28)</sup>。そのインクによる後援は敵を脅かし、敵は軍隊を恐れずとも、インク壺に出会うことは怖れる。一層黒々とするべく<sup>29)</sup>インク壺がやってくると、敵は知っているのだから。〔txt. 310〕

#### 砂壺<sup>30)</sup>

砂壺から砂丘が隆起し、泉が湧き出す。それによって砂が動き出し、蟻の節足のように這

- 21) 敵を威嚇するような文章を書くことを示している。「黒きもの」と訳した *aswad* は、同じ綴りで母音を変えると *usūd* (複数の獅子) と読める。一方「唸る」(zaʿīr) は、とくに獅子が唸る様子を表す形容詞である。つまり「唸る黒きもの」という句には、一種の掛け言葉によって、唸る獅子の威圧感が込められているのである。
- 22) *qašura mağārī-hi*. ペン先が鈍って、インクを含んで一度に書ける長さが短くなることを示している。代名詞 *hi* はペンを指している。
- 23) *bārī-hi*. 書記のこと。代名詞 *hi* はペンを指している。
- 24) *al-dawā*.
- 25) *samura*. 「夜に話す」(*samara*) との掛け言葉と思われる。
- 26) 預言者ムハンマドが用いた旗の一つに「鷺」(‘uqāb) と呼ばれる旗があったこと、また、マムルーク朝スルターン＝ナースイル・ムハンマドの紋章の一つも鷺であったことが想起される。ここでは、特に後者との関連が窺われよう。訳注(5)の「高貴なるメディナのアミールに対する指示部分」の中でも、「鷺(‘uqāb)と名づけられた我らの旗」という表現が登場している [“flags,” EI3; Walker 2004: 60; 訳注(5): 15頁]。
- 27) ナイル川 (*al-Nīl*) は、*nayl* と読めば「獲得」の意味があり、ここでは、ナイル川の増水による農地からの糧の獲得が連想され、直前の「インク壺からの糧」の「糧」とイメージが繋がっているか。
- 28) 原文は、*tuškaru ayādī al-Nīli wa mā yağī’u min al-qalami qadru isba’i-hā*. 接続詞 *wa* 以降を前文の状況を示していると理解して上記の訳となっている。*ayādī* と *mā...al-qalami* の部分を *tuškar* の主語と捉えるなら、「一指分〔増えた〕だけであっても、ナイル川の助けも、ペンよりきたるものも称えられる」と訳出することも可能か。
- 29) 黒い (*sawād*) という言葉には、大人数が集まることも示している。したがって、この部分は、インク壺のインクを使って多くの命令が出されること、また、命令によって多くの兵士・物資の調達が求められることを意味している。
- 30) *al-mirmala*. 文字を書いた後に余分なインクを吸い取り、インクを乾かすために、紙の上に撒く細かい砂を入れた容器。吸取紙の普及以前に用いられた。古くは「粉塵器」(*mitraba*) と呼ばれ、銅製もしくは木製が多く、一般的に文具箱のなかに置かれる。口の部分に荒い砂が入ることを防ぐ網が付けられている。高位の官僚や軍人は、ココナツの実ほどもある大きな銅製の

う。そこ〔から湧く〕雲が巻物 (*darğ*) の筆跡 (*madrağ*) を満たし、隙間なく行間を埋める。砂壺は、直ちに庭園を育み、赤い砂と白い砂を集める。〔文面の〕細部と全体に砂が行き渡り、そのペールの下から、〔一面の〕砂地 (*ramla*) よりも美しい、それぞれの文字<sup>31)</sup>が現れる。そのしなやかな〔砂の〕外衣は、切れ切れになって、美しくなり、ザルード<sup>32)</sup>とそこの砂丘 (*naqā*) の砂の裳裾を引く。紙の白さ (*qirtāsī al-qirtās*) は〔ms. 134b〕赤茶色になるが、血で染めたわけではなく、羊皮紙 (*muhraq*) の花々はアネモネと化すが、春が育んだわけではない。天なる手跡 (*samā' al-ḥatt*) は、それによって、消える心配がなく、その雲の湿気は、太陽の照りつける昼間に影を投ずる。彼は<sup>33)</sup>、白昼に夕の茜を振りまき、雨滴の真珠が葉に加冠するものによって、〔文書の〕各行に加冠する。あれなる文字たちは、それによって目覚め、最高の表現を語って、朝を迎えた。その砂は麝香であるかのようで、その砂塵は芳香であるかのようである。

### 鞍と頭絡<sup>34)</sup>

なんと多くの鞍が、そこにあるだろうか。鞍は、その形態において額と、その色彩において新月と相争う。鞍から星が輝き、その星によって騎獣 (*markab*) は安全に旅する。鞍は<sup>35)</sup>、広げた親指と人差し指の間<sup>36)</sup>のように、道行きの近さを示す。あるいは、吉報を知らせる者がもたらした芳香で香り付けされた<sup>37)</sup>ようである。夕暮れがその黄金で鞍を包んだような、あるいは、稲妻がその炎で鞍に彩りを与えたような、〔こうした比喩が成り立つように〕鞍はそれに似たものに結びつけられる。類似の条件の全てが等しくなかったとしても。〔txt. 311〕我々の近い者たち (*awliyā'-nā*) は、それらの条件に依拠して、向かい合った寝台の上の兄弟たち<sup>38)</sup>となるからである。このことは頭絡にもあてはまる。頭絡が<sup>39)</sup>馬を捉えていないと、馬は飛んでいってしまうし、頭絡が馬に手綱で合図をしないと<sup>39)</sup>、馬は進まない。

ものを用いた。一方、カーディーは木製のものを用いることが多かった。中に入れる砂は、粒の細かい赤いものが好まれたが、白色や黄色など、様々な色の様々な産地のものが用いられた [Subh, v. 2: 478-480]。

- 31) *rumla*. 「野牛の脚の上の様々な色」「黒い縞」を原義とするので、ここでは黒い線で書かれた文字と解釈した [Lane: 1160]。
- 32) *Zarūd*. クーフアからの巡礼路の中で、サーラビーヤ (*al-Ta'labīya*) とフザイミーヤ (*al-Ḥuzaymīya*) の間の砂地 [ペイルート版: 275頁注6; “Zarūd,” *Buldān*]。
- 33) 動作主が不明瞭だが、書記などの人物を想定していると思われる。あるいは、「〔砂の〕外衣」を動作主と解釈することもできる。
- 34) *al-sarğ wa al-liğām*.
- 35) 校訂本では *ka-anna-ha'* となっているが、L 写本に従い、*ka-anna-hu* と読んだ。
- 36) *fitr*. 広げた親指と人差し指の間の短い隙間を意味する。
- 37) *muḥallaq*. 動詞 *ḥallaqa* の受動分詞。*ḥallaqa* には、ナイル川の満水祭礼において、ローダ島にあるナイルメーター (*Miqyās*) の縦穴の中心に立つ水位計の石柱と縦穴の周辺にサフランを塗りつけて香り付けするという意味がある [石黒大岳2002: 121頁]。なお、ペイルート版 [276頁] では、*muḥallaf* (後に残された者) となっている。
- 38) *iḥwānan 'alā surarin mutaqaḥbilatin*. 『クルアーン』15章47節の「兄弟として、寝台の上に向かい合って (*iḥwānan 'alā sururin mutaqaḥbilīna*)」を踏まえた表現。
- 39) *law lam yu'ayyih la-hā bi-al-a'innati*. ペイルート版 [276頁] では、「頭絡が手綱で馬に注意を向けないと (*law lam ta'bah la-hā bi-al-a'innati*)」となっている。

こうしたこと〔が起こって〕は、我々が御前に侍る王に相応しいことではなく、王が〔万端〕整えて、手綱によって稲妻を率いることにはならない。王が新月によって鞍を置き、昂によって頭絡を据えたとしても。

#### ラクダ用鞍と勒<sup>40)</sup>

既にラクダは勒をつけ、任務に向け逸り立っており、鞍に飾り帯がつけられ、出発するばかりとなったとき、我々は〔引き締めて止めていた〕勒を緩めてラクダを進ませた。ラクダは鞍から新月を昇らせ、飾り帯から影を伸ばした。雷雲にのみ泉 (aḡāt) へと急ぎ立てられて夜行した。〔ms. 135a〕 乗り手がその勒を手によれば、〔実際には〕距離は短くはないが、遠い道のりではない。

#### 鞭<sup>41)</sup>

駄獣をしつけ、速度を緩めぬように鞭をとった。その稲妻で駿馬の〔汗という〕春雨を駆り立て、鞭をあて続けると、馬は驟雨のような汗を噴き出した。

#### 旗、すなわち軍旗<sup>42)</sup>

神の支援を受けし軍旗が広げられると、幸運がめぐってきて、その軍旗の大きな影が軍勢を覆った。その回りを、餌を与えられ、軍団の獲物を得られると確信した鷲が旋回した。その軍旗ゆえに、黄色い旗が幸運であることはよく知られている。軍旗が掲げられると、その後ろを軍隊が進み、〔txt. 312〕 戦闘態勢を整えた。〔スルターンの〕軍旗は、カリフの黒旗を囲んで、その中核とし、ともに進んで、その鞘から抜かれる剣となった。

#### 日傘、すなわち傘蓋<sup>43)</sup>

我らの上に天蓋が掲げられた。それは、我らが進むときには日除けとなり、我らが止まるときには我らとともにある。その下にあるのは柄のみであり、その上にあるのは天のみであった。駿馬の背の上に設けられ、建物がなくとも戦時への備えとなる。それは、移動時に張られた我らの天幕であり、その前を獣が歩き、その上を鳥が舞うソロモンのごとき我らが王の覆いである。

#### 太鼓<sup>44)</sup>

太鼓が叩かれた。それは、〔ms. 135b〕 まるで大地がひっくり返り、山々が男どもとともに騒いだかに思われるほどであった。閱兵の日が、最後の審判の日、最大の審査の日であるかのように思われるほどであった。人はただ平安のみを願った。

#### 喇叭<sup>45)</sup>

神の支援を受けし軍団の只中で喇叭〔の音〕が雷鳴の如く轟き、大地が震えた。まさに

40) al-kūr wa al-zimām.

41) al-sawṭ.

42) al-a'lām wa hiya al-'aṣā'ib.

43) al-mizalla wa hiya al-ḡitr. ḡitr (傘蓋) はペルシア語の čatr に由来する語。

44) al-ṭubūl.

45) al-būqāt.

人々は「イスラーフィールが角笛 (šūr) を吹いた」と言う<sup>46)</sup>。喇叭が吹かれて出撃が宣告されれば、戦時においては進軍喇叭のみが聞かれた。喇叭が鳴る度、敵どもは幾度も不意打ちを喰らい続ける。喇叭とともに剣の轟きによって、彼らの上には火獄の炎と溶けた真鍮が降り注ぐ<sup>47)</sup>。仮に大海の潮が、喇叭の音によって一度引けば、もはや満ちることはない<sup>48)</sup>。たとえ風がなくても、私は〔その音を〕ハジュルの村にいる者にまで聞かせることだろう<sup>49)</sup>。  
[txt. 313]

#### スルナーイ、すなわち縦笛<sup>50)</sup>

かのスルナーイは、ナーイより上にあり続けた<sup>51)</sup>。もしこれが無ければ、ズナム<sup>52)</sup>は有名でなかっただろうし、ムータスィム<sup>53)</sup>との逸話は人口に膾炙してはいなかっただろう<sup>54)</sup>。また、〔もしスルナーイが無ければ、〕ズナムの〔奏でる〕音色はシャッバーバ<sup>55)</sup>に及ばなかっただろうし、シャッバーバの白髪おもがいの白さにふさわしくなるには、若さ (šabāb) を犠牲にしなくてはならなかっただろう。

#### 首覆いおもがい、すなわち首覆い<sup>56)</sup>

替馬 (fars al-nawba) にスルターンおもがいの〔馬にふさわしい〕首覆いが取付けられた。首覆いには、まさに曙の雨雲が黄金の稲光で輝くかのように純金が織り込まれているので、見た者

46) 『クルアーン』36章51節を踏まえた表現。ここに登場するイスラーフィール (Isrāfīl) は、終末の日に、喇叭を吹いてその到来を伝えるとされる天使。1度目の喇叭で全ての生き物が死に絶え、2度目の喇叭で全ての靈魂が蘇ると言われる [クルアーン (中田ほか訳) : 165頁注706]。

47) 『クルアーン』55章35節を踏まえた表現。同節の句に「喇叭とともに剣の轟きによって」の文言が追加されている。なお、nuhās を「溶けた真鍮」とする解釈と、「煙」とする解釈に分かれる。邦訳ではそれぞれ「どろどろ溶けた黄銅」[クルアーン (井筒訳) : 下巻165頁]、「溶けた真鍮 (あるいは煙)」[クルアーン (中田ほか訳) : 568頁]、「煙」[クルアーン (藤本ほか訳) : 2巻313頁; クルアーン (三田訳) : 668頁] とある。

48) 喇叭の音によって進軍した兵士たちの攻勢に、敵軍が兵を引いて撤退する様子を表した比喩表現。

49) ハジュル (Haġr) はヤスリブ近郊の村。研究篇 [288頁] によれば、この一文は al-Muhalhil による詩の一節を引用したものである。この詩では、兜を剣で打つ音が遠く離れた地にまで聞こえる様子が描かれている。ムハルヒルは、ジャーヒリーヤ時代の詩人 [“al-Muhalhil,” EI3]。

50) al-ṣurnāy wa huwa al-zamr.

51) ナーイ (nāy) は、一般に笛を意味する語。この文は、文字通り、スルナーイは普通のナーイよりも優れていることを表す一文であるが、単なる nāy の前に「上」(šabr) が付いて ṣurnāy になるというように、言葉上の技巧を凝らした表現でもある。

52) Zunām. アッバース朝期に活動した宮廷演奏家。笛の名手として知られ、多くの逸話が残る。彼が改良したためにその名を冠して nāy zunāmī (zulāmī) と呼ばれる木管楽器も有名。長命を保ち235/850年頃に没するまで、ラシード、ムータスィム、ワースイク、ムタワッキルと多くのカリフに仕えた。本項目終盤の「シャッバーバ」と「『若さ』を犠牲に」の文言は、彼の長寿を前提とした掛詞と考えられる [A'lām, v. 3: 49; Farmer 1929: 498; Sawa 2019: 49]。

53) al-Mu'tašim. アッバース朝第8代カリフ。在位218~227/833~842年。

54) 「笛吹きおもがいのズナムの逸話」はよく知られていたようで、『歌書』をはじめ様々な史料に登場する。例えば、多くの逸話を交えて通史形式で書かれた君主論『アルファフリー』には、死の間際のムータスィムにズナムが船上で笛を吹いて聞かせる逸話が収録されている [アルファフリー : 2巻125頁]。

55) šabbāba. 主に葦で作られた笛。本訳35頁を参照。

56) al-miṣadda wa-hiya al-raqaḇa.

は感嘆し喜びが湧く。また、その馬は首覆いによって誉れの大きさを知り、その首は〔誇らしげに〕伸びる。これが起こるのは、待ち望まれた希望が実現したまさにその時のこと。主人の手に、〔一頭の馬の〕首 (raqaba) に取付けるもの (首覆い) があれば、〔その代償として〕彼はついには千人の奴隷 (raqaba) を解放する<sup>57)</sup>。〔ms. 136a〕

#### 馬衣<sup>58)</sup>

馬衣が我々の前を運ばれ、それを囲んで従者が進んだ<sup>59)</sup>。それについての噂が飛び立った。「覆い被さるもの」の話が、あなたの許に届いたか〔クルアーン：88章1節〕<sup>60)</sup>という言葉〔が届くこと〕のない国はなかった。そしてそれを運ぶ者は、望みが達せられたことと来たる日々を喜んで、その歓喜のあまりに揺れる馬衣を伴って闊歩する。〔txt. 314〕

#### 二頭揃いの馬<sup>61)</sup>

上記の諸道具に関連して、ここで二頭揃いの馬について述べる。

二頭揃いの馬が前を進んだ。二人〔の騎手〕が芦毛の2頭の馬に跨がり、両者の間で連携が取られ、歩調を合わせて。2頭は生来の純粋さゆえに〔芦毛よりも〕白く見えた。右と左に分かれ、蟻が這うように静かに進んだ。この2頭は、一組になって以来、別れることなく、一緒になって以来、離れることはなかった。反目しあうことなく友情を保ち続け、一体となり、〔連結して綴られる〕ラームとアリフのように一つであるかのようになった<sup>62)</sup>。

### 第4項 旅の道具<sup>63)</sup>

#### 輿<sup>64)</sup>

輿は、乗る者がそこで安息を得て、陸路を旅する「揺り籠」として用いられた。それは、海を渡る者が海路を旅する船のようなものだ。それに乗る者は距離の遠さに気付かぬうちに〔目的地に〕近づき、その上にいる者は星がいつ昇って沈んだのか気付かない。それは複数

57) ここで「首覆い」を意味する *raqaba* の語には「首」や「奴隷」の意味もあり、この一文は、それらを掛詞として用いた表現になっている。

58) *al-gāsiya*.

59) Beckerによると、馬衣は本来、馬の鞍にかける刺繍が施された布や革製の覆いであるが、セルジューク朝やマムルーク朝では、王権を示す徽章としての機能も有した。スルターンが行進の際には、王子や高官たちがそれを順に肩にかけるなどして身につけ、臣従を誓う慣行があった〔Becker 1910〕。

60) 最後の審判以降を描いた『クルアーン』88章は、ここに引用された第1節に由来して「覆い被さるもの (*gāsiya*) 章」と呼ばれる。「覆い被さるもの」は世の中の一切のものが覆われる最後の審判の情景を意味し、「大災」などとも訳される。ここでは *gāsiya* という共通した語を含むクルアーンの一節を、馬衣にまつわる噂が、各地に広まるほど素晴らしいものであったと伝える表現として用いている。

61) *al-ḥayl al-ḡiftā. ḡiftā* は、「一對」「つがい」等を意味するペルシア語 *ḡuft* に由来する語。スルターンが騎乗する馬と同様に飾られた一對の馬を意味する。特別な行事に際して、スルターン直属の二人のマムルークが揃いの錦の帽子を被って騎乗した〔*Ṣubḥ*, v. 2: 133-134, v. 4: 8〕。

62) アラビア文字のラーム (J) とアリフ (I) を続けて記すと、通常 لا という綴りになる。

63) *ālāt al-safar*.

64) *al-mihaffa*. 上部に天蓋のある輿で、2本の轆 (ながえ) を前後2頭のラバまたはラクダが担いだ〔*Ṣubḥ*, v. 2: 137〕。

のラクダによって運ばれ、前後左右に揺れながら、高地も窪地も気にすることなく砂漠を進んだ。輿で夜旅をする者は、その手が手綱も頬革（‘*idār*）も握ることなく、さほど眠らないうちに、〔目的地に〕到着するのである。〔ms. 136b〕

#### マフミル<sup>65)</sup>

ラクダたちが前へ進み、その天蓋が持ち上げられた。ラクダ追い（*hādī*）は、歌ってラクダを急かし、急いで進むと、谷のそばでラクダを歌で喜ばせた<sup>66)</sup>。すると、育ちの良いラクダ（*naḡīb*）たちは、その天蓋を載せて跳ね躍り、天蓋の頂が傾いた。〔txt. 315〕その老練なラクダたちの瘤<sup>67)</sup>の上で、砂丘のような〔形をした〕天蓋が揺れた。そして、天蓋の保護が求められるようになった。まさに風は激しく嫉妬する者（*ḡayrān*）のように、素晴らしき薄衣（*rayṭa*）と髪の毛をめぐって天蓋と競わんとした<sup>68)</sup>。〔出発前に〕天蓋の高い塔がラクダの背に寄せられ、我らともにあつたとき、それが剥き出しであったので、最良の覆いを被せられたのである。

#### 天幕<sup>69)</sup>

彼のためにあらゆる地に天幕という集いの館が立てられた。蔭の差す中庭が設けられた。その柱は天幕の綱を張っており<sup>70)</sup>、あたかもその天幕の柱が天の杭、その天幕の杭が大地の杭のごとくである<sup>71)</sup>。それは月を昇らせ天球を引き上げ、天使が集う天となった。そこにはいずれも高い天幕が建てられ、あらゆる幕屋が途切れることなく綱と杭で建てられた。その

65) *al-maḥmil*. ラクダの背の上に取り付ける小部屋。とくに高貴な女性がラクダで移動する際に用いられた。マムルーク朝時代には、政府が特別に飾り立てたマフミルが権威の象徴として巡礼団とともにマッカへ送られていた [Šubḥ, v. 2: 137; “maḥmal,” EI2; 「マフミル」『岩波イスラーム辞典』]。

66) ラクダを連れて旅をする際には、ハーディーと呼ばれるラクダ追いが、その美声で歌いかけることによって、ラクダの歩調を制御し一隊を導いた [堀内勝1986: 313, 327頁; 堀内勝2015: 174–175頁]。

67) 「老練なラクダたちの瘤」と訳した *al-tilā’ al-šawārif* は、直訳すると「複数の老いた丘」となる。このうち「老いた」に当たる *šārif* は、とくにラクダに用いられる形容詞で、「老いて威厳を増すもの」という意味がある [堀内勝1986: 135頁]。したがって、この形容詞に修飾される「丘」(*tal’a*) は、ラクダの瘤の比喩と解釈した。

68) この文は、フサイン・ブン・アリーの子孫シャリーフ・ラーディー（359～406/970～1016年）[“*al-Sharīf al-Rādī*,” EI2] の詩の以下の対句を踏まえている。

まさに風は激しく嫉妬する者のように我らと競わんとした

砂丘の上で、素晴らしき薄衣と髪の毛をめぐって [研究篇: 289頁]

「激しく嫉妬する者」と訳した *ḡayrān* という語は、自分の権利や大切なものに手出しすることを断固として拒む者という意味をもつ [Lane: 2316]。この詩および『高貴なる用語』の本文では、砂漠で激しく吹き付ける風の様子を「薄衣と髪の毛」という語句で暗示される女性をめぐる争いに喩えていることから、「嫉妬」という訳語を用いた。ただし、男性中心のアラブ社会では、身内の女性を他者から守ることは男性の重要な徳目の一つとされており、このような態度や行動は、自尊心や名誉をかけて争うという肯定的な意味をもつ。

69) *al-ḥiyām*.

70) 「張っており」と訳した箇所は、校訂テキストでは *šatta* とあるが、L 写本に従って *šaddat* と読んだ。

71) ここでの「天の杭」(*watad al-samā’*) とは天の北極を、「大地の杭」(*watad al-ard*) とは天の南極のことを指している。

中庭が大地を覆い、それらの建物が天全体を表している。朝になって、留まる理由がなくなると、それは取り払われた。その民には定まった故郷も家もなく、あたかも風の背に乗った戦の隊列のごとくである。

それはその主たちに良きものをもたらし<sup>72)</sup>、嵐はその雲の下に慈雨を降らせた。その周囲には渴きに苦しむ人々が行き着く場が常にあり、それが立てられたところは「汝は雨をもたらした、おお天幕よ」と言われる。

#### ハルガーフ<sup>73)</sup>

それには天蓋が立てられ、その覆いの下には雲が広がり、その天井の上には天の天蓋<sup>74)</sup>がかかっている。〔ms. 137a〕それはルバド<sup>75)</sup>が生きた〔ほど長い〕鷲の寿命をもって組み立てられ、勝馬を繋ぎとめるがごとくに固く結ばれて、その羊毛の布は長きにわたってそこから落ちることはない。それらの〔ひとつひとつの〕部分は脆弱であったけれども、組み立てることによって強くなり、その羊毛は塵をかき立てる風 (sawāfi al-rīḥ) に乱されることはない。その赤いフェルト帽は〔txt. 316〕バラ色の頬の潤いをもたらし、長く保たれることで、その所有者の御代が永遠の命を持つことを知らせている。

#### 飲料水用革袋<sup>76)</sup>

彼らとともに飲料水用革袋が運ばれた。その袋〔にもたらされる〕そよ風で、かの真昼の暑熱の中でも水は冷たく保たれ、その快適な蔭のことが口にされる。すべての下僕がそれを委ねられるわけではない。それを運ぶ者は、その袋の革さえ細切りにされなければ、〔自分が〕細切りにされ干し肉のようになって怒ることはない。もしそれが約束であったなら、彼はそれを破ることなどできず、あるいはそれが〔自分の子の〕母親であったなら、彼女の子ども以外は受け入れない<sup>77)</sup>。その運び手とともに雲は流れ、彼を満たす。それゆえそれを持つ者は満足して、雲の留まる場所を求めることはない。

#### 馱獣用の水桶<sup>78)</sup>

ラクダは、潤いで渴きを癒やして、かの水桶から〔頭を〕あげた。その水桶は、人知を超えた力を与えるもの<sup>79)</sup>で、満たされた。そして、水桶が〔その水桶に〕汲み入れた、甘露な

72) 「良きものをもたらし」と訳した箇所は、校訂テキストでは *aḥṣṣat* とあるが、L 写本並びにペイルート版 [279頁] に従って *aḥṣṣanat* と読んだ。

73) *al-ḥarkāh*. 布で覆われた木製の小部屋で、スルターンの就寝や防寒のために旅行に携帯され天幕の中に設置された [《*Ṣubḥ*, v. 2: 138; 研究篇: 289頁]。

74) *qubbat al-samāʾ*. ここでの「天の天蓋」は天幕のことを指している。前述の「天幕」を参照。

75) *Lubad*. ルクマーン・ブン・アードが飼っていた7羽のワシのうちの最後の1羽で、非常に長生きしたと言われている [研究篇: 289頁; 訳注 (11): 123頁注64]。羊毛の布 (*labad*) との掛詞になっている。

76) *adāwā al-māʾ*.

77) 革袋を女性に例え、その女性以外には自分の子を産ませないほど大切に扱う様子を表現している。

78) *al-ḥiyād*. 携行用の皮革製のもの [《*Ṣubḥ*, v. 2: 139]。

79) *mā ṭālat bi-hi yadu ʾabqārī-hā*. ラクダに力を与えるものとは、すなわち水を意味している。

水が溢れた。それは、まるで湧き出る水の流れであるかのように。また全ての革袋<sup>80)</sup>は、そこから糧を与えられるが返報はしない。それが、これを〔水桶の〕敬虔なる行為であると信するがごとく。

### 大鉢<sup>81)</sup>

かの広げられた食卓にして、運ばれてきた大鉢に感謝。また、かの箕に感謝。もしその〔料理の盛り〕が山のようなのであれば、それに伸びる手の多さによって〔料理が〕撒き散らされたであろうし、またそれが跪く<sup>82)</sup>ラクダのようなのであれば、それは、それが運んでいる料理の重さに〔押しつぶされ〕困憊させられてしまったであろう。大皿 (ğawāb) のごとき大鉢からは、それに不満を述べる者には応答 (ğawāb) がない<sup>83)</sup>。[txt. 317]

### 料理鍋<sup>84)</sup> [ms. 137b]

日が暮れて、彼らは高き運命と、黄金の火に飾られる料理鍋の持ち主となった。それはまさに不動の山のごとくであり、夜旅をするラクダのごとくである。料理鍋には、火を焚く炉台の上で、腰に赤子を背負ったザンジュ女性<sup>85)</sup>のごとく〔黒く〕なったものや、あちらこちらから昼の終わりを侵食する、漆黒の闇夜のごとく〔黒く〕なったものがある。

### 篝火<sup>86)</sup>

夜はそれによってドレスをまとう。そのマチ布は紅く染まっている。その炉台は喜びへと招く天使のように夜を過ごす。その夜、黄金の樹はそれからいくつ枝分かかれし、尾をひく流星はいくつ流れ落ちるのだろうか。夜の鎧はそれによってサフラン色へと染められ<sup>87)</sup>、火をともし炉台にアネモネの赤さが育つ。夜の訪問者や朝晩の来客がその許に到来し、夜の旅行者は、疑い深き者以外はすべてその許へ近づいてくる。

### 鼎石<sup>88)</sup>

鼎石の三つの石が後に残った。それは、彼らが去ったのち、灰を敷き広げ、朝にはそのす

80) qirba. この「革袋」が意味するところについては、ラクダそのものの比喩という考え方や、ラクダに個別に水を与える小分けの袋という考え方などがあり得る。

81) al-ğifān.

82) bawārik. bārika の複数。「膝」の意。bārik は「跪くこと」を指す [Kazimirski, v. 1: 116]。

83) 「大皿のごとき大鉢」という慣用句が存在する [Kazimirski, v. 1: 349]。

84) al-quḍūr.

85) zanġīya mutawarrīka. ザンジュ人はアフリカ東海岸ザンジバル島周辺の黒人住民。広く奴隷として用いられた。マムルーク朝末期カイロの医学者アムシャーティー (902/1496年没) が著した奴隷購入の書には「ザンジュの女は、幼児の授乳や養育、踊りと笛吹きに適している」と記されている [清水和裕2009: 168頁]。

86) nār al-qīrā. 来客を歓迎する目印として高台に焚かれる [研究篇: 290頁]。堀内は「もてなしの火」と訳している [堀内勝1979: 210-211頁]。

87) rudi‘a. 「色が変わる」の意。また名詞 rad‘ には「サフラン」の意味もある [Hava: 247]。

88) al-aṭāfī. 料理鍋を上置く三つの石、もしくは鍋をつるす三脚台 [ペイルート版: 281頁注3]。この文の中ではアラビア文字表記の視覚的な要素と音を用いた言葉遊びが行われている。例えば、tā’ (ث) および šīn (ش) の二文字は山形の三つの点を特徴としている。また aṭāfī という単語のなかには、tā’ の文字及び音と、「~の中にある」を意味する前置詞 fī の音が含まれている。同時に、この文は、旅行者が野営の調理の際に用いた鼎石が、翌朝そのまま放置されている様子をモチーフとしている。

べてが固まった。あたかも、それは *tā'* の文字の三つの点のごとくであり、〔それを見て〕尋ねるすべての人々の「彼らはどこにとどまっていたのだろう (*tawaw*)」という問いのなかにそれはある。また、それは *šīn* の文字の三つの点のごとくであり、〔それを見て〕語るすべての人々の「彼らはここにいた。もしくは、ここで彼らは〔肉を〕焼いていた (*šawaw*)」という言葉のなかにそれはある。ラクダたち (*rakā'ib*) はじっくりとどまらずにそれを通りすぎることはなく、またおそらく *rakā'ib* という、ラクダ〔を意味する語〕の綴りは、この鼎石からマッダを手に入れずにそこに到達するという事もない<sup>89)</sup>。[txt. 318]

#### 松明の光<sup>90)</sup>

かの〔松明の〕光は数を増やして夜の闇を飲み込み、昼〔のごとき光〕が洪水のごとく溢れた<sup>91)</sup>。地平は〔松明の光という〕星で満ちたので、誰も〔明るく輝く〕スハイル星<sup>92)</sup>について尋ねる必要がなかった。さらに、その光がもたらす情報は明白どころではなく、その光の元素は金 (*'iqyān*) のごとくである。

#### 一對のランタン<sup>93)</sup>

夜の薄闇の中、そのランタンという一對のファルカド星<sup>94)</sup>に火が灯り、その火を灯した二人の兄弟は歩調を合わせた。[ms. 138a] 暗闇がそのランタンという二つの目によって見通され、そのランタンの炎が呻き声をあげる。すると、暗闇は槍先につけて運ばれたランタンを〔隊列において〕先行する者の二つの耳と見なす。〔槍先につけて運ばれた〕そのランタン〔の光〕は暗闇の喉を突き刺し、そのランタン〔の光〕という、旗に縫われた金糸は暗闇にたなびく。このランタンによって光塔 (*manār*) が現れた。すべての旗の先端に火が灯っているのである<sup>95)</sup>。

### 第5項 狩りの道具<sup>96)</sup>

#### 罨<sup>97)</sup>

獲物は災難に遭遇した。その災難は胸中にその獲物を引き寄せ、猛獣 (*ġāriḥa*) の手に落

89) マッダとはアラビア文字のハムザとアリフが合体したもの (*'ā*) である。しかし文中の言葉にもかかわらず、*rakā'ib* という語にも *atāfi* という語にもマッダはそのままの形では存在しない。

90) *aḍwā' al-mašā'il*.

91) ここでは、*sayl* (洪水) や *tafaḥa* (〔水が容器や川などに〕溢れんばかりに満ちた) といった河川と関連する言葉が用いられているが、これは「昼」(*nahār*) と「河川」(*nahr*) の綴りが近いことに由来する言葉遊びと考えられる。

92) *Suhayl*. りゅうこつ座の  $\alpha$  星カノープス。訳注 (1) 43頁注78を参照せよ。

93) *al-fānūsayn*.

94) *Farqadān*. こぐま座の  $\beta$  星と  $\gamma$  星。こぐま座で北極星に次いで明るい二つの星であり、両者はこぐま座の上半身に並んで位置し、北半球の多くの地域において沈むことなく北極星の周囲を回転する。なお、*farqad* は子牛を意味する [Lane: 2387]。

95) 「旗の先端に」以下は、ジャーヒリーヤ時代から初期イスラーム時代にかけて生きた女性詩人 *al-Ḥansā'* の詩の引用 [研究篇: 290頁]。ハンサーについては訳注 (4) 44頁注54を参照せよ。

96) *ālāt al-šayd*.

97) *al-faḥḥ*.

ちたも同然の死を保証した。罝の弓がその策謀でもって獲物を捕らえ、いやましに拘束を強めた。その結果、獲物は力を失い、その罝によってほとんど動けなくなった<sup>98)</sup>。[txt. 319]

網<sup>99)</sup>

網が獲物に投げられた。網はその目で獲物を捕らえ、その獲物の死すべき運命ゆえに〔その獲物を〕捕まえた。獲物にかかった状態で、網の端が引き絞られた。すると、〔その獲物は〕丸裸であろうと鎧を着ていようと網から抜け出せず、先行するものであれ後続するものであれ網から逃げ出せなかった。網は、かの完全武装した勇士〔たる獲物〕を、小さな羊<sup>100)</sup>を捕まえるように捕まえた。網がその網の目にその獲物を投げ入れると、その獲物は「結び目に息を吹きかける老婆の悪から」〔クルアーン：113章4節〕逃れられるよう〔神に〕加護を求めることもできなかった。網は最も遠くの獲物まで追い立て、最も反動的な獲物でさえ柔弱だと感じた。網は、魔法使いが投げた縄と杖<sup>101)</sup>による魔法とともに獲物に迫り、かの吉兆〔たる獲物〕を捕らえ、かの滑らかに走る馬 (sābih)〔のごとき獲物〕をその網という馬場にとどめた。

吹き矢<sup>102)</sup>

彼は吹き矢を用いて放ち、吹き矢の闇夜に星々〔の礫を〕を投じた。そして従わぬ鳥を吹き矢で追いかけさせ<sup>103)</sup>、すると鳥はその流星を以て石打ちにされた。彼は火を熾すわけでもないのに息を吹き込み、腫れあがるほどではなく彼〔の頬〕が膨らむと、吹き矢に〔息を〕吹き始めた。そうして彼は大蛇の毒を投げつけて、前腕を吹き矢の先端まで伸ばして手ずから星々を送り出した。すると彼は〔ms. 138b〕槍を投げる掌星<sup>104)</sup>となった。彼は吹き矢によって次々と〔獲物を〕倒した。すると彼は屠殺する者の幸運星<sup>105)</sup>となった。そして彼は、吹き矢から小さな弾の泉を滴る水のごとくあふれさせ、吹き矢のまっすぐ立てられた筒を天へと昇るもの（弾）であふれさせた。[txt. 320]

98) 「その罝によって」以下は、ムタナッビーの詩の一節を踏まえた表現 [研究篇：290-291頁]。

99) al-šibāk.

100) naqad. 「naqad よりも卑小な」(aḍall min naqad) という慣用句があるように、卑小な存在の例えとされる小さな羊あるいは山羊を意味する語 [研究篇：291頁; Lane: 2836-2837]。

101) 『クルアーン』26章44節を踏まえた表現。

102) al-zabrītāna. この語の原綴は写本によって異同が多く、校訂テキストは Sh 写本及び S1 写本の表記からこの綴りを採用している。カルカシャンディー『夜盲の黎明』では al-zabaṭāna の綴りで表記され「中を空洞にした、槍のごとくまっすぐな木製の道具で、獵師が小さな粘土の弾を端に込めてそれに息を吹き込むと、そこから弾が鋭く飛び出し、鳥に当たって撃ち落とす」と説明されていることから「吹き矢」と訳した [Šubh, v. 2: 145]。

103) 『クルアーン』37章7-10節「こうしておけば〔神命に〕従わぬシャイターン（サタン）も一切〔上天には〕近寄れぬ。（中略）〔シャイターンが〕忽ち煌々たる焔に追いかけられ〔焼け落ち〕る」を踏まえた表現 [研究篇：291頁]。

104) al-simāk al-rāmiḥ. アークトゥルス（うしかい座α星）のアラビア語名。「スィマーク」とは「突出したところ」の意があり、星座図上の位置との関連を踏まえ「差し出した掌」と解釈される。おとめ座のスピカとアークトゥルスは合わせて「両スィマーク」と呼ばれており、ともに星座図において南に突出した掌の場所に位置する。スピカは「素手の掌」(al-simāk al-a'zal) と呼ばれ、アークトゥルスは「槍投げの掌」と呼ばれている [堀内勝2011: 228, 238-239頁]。

105) sa'd al-dābih. やぎ座β星のアラビア語名。

釣り針<sup>106)</sup>

釣り針のかの鉤は獲物〔をかける〕ために曲げられ、かの惹きつけるものは獲物に向けて下ろされた。釣り針は「彼女の首に〔つけられてある〕棕櫚の縄」〔に相当する〕<sup>107)</sup>糸を介して獲物へと吊り下ろされた。こちらの世界の風の香がすると、それが獲物には身体から魂が離れるための理由となった。そして水のペールの下から、隠されたものが外に出され、獲物の乙女たちは〔姿を露わにする〕許しを求められた。すると彼女は沈黙することで、許しを与えたのだった<sup>108)</sup>。それから、かの獲物の乙女 (tarīda) たちが捕らえられ、かの大針<sup>109)</sup>によりその口が縫い留められ、深い海の底のかの山々で、彼女が釣られていくことに仲間たちが驚嘆したとき、彼女はうつむいて葦の檣の上に運ばれ、皮膚も神経も傷つけぬ矢に射られた。

第6項 商取引の道具<sup>110)</sup>天秤<sup>111)</sup>

天秤によって、抛り所とされ公平さについて頼りとされる正義 (‘adl) は、うち立てられた。〔正義とは〕不変の善行を成すものであり、正当性なく舌を動かすことのない公平なるものである。成功する者とは天秤を以て善く働く者であり、〔最後の審判の日に天秤が〕傾く者<sup>112)</sup>とは〔商取引において〕天秤皿で重く量る者<sup>113)</sup>である。彼は最後の審判の日に、正しい秤<sup>114)</sup>によって中傷者に応える。そしてもし彼には、てんびん座が金星の宮<sup>115)</sup>でなかったとしても、きっと木星すなわち「商取引を行う者」<sup>116)</sup>の領域<sup>117)</sup>にあることだろう。

天秤皿にあるもので重く量る者は、〔最後の審判の日に天秤皿の中で〕軽くなることを免れ、力強くあり続ける。天秤は、最後の審判の日に人類の行いに対して用意されているのであるから。そしてこのウンマの主 (預言者ムハンマド) は、彼が語った夢の中で、天秤が天

106) al-ṣanānīr.

107) 『クルアーン』111章5節「彼女(アブー・ラハブの妻)の首には棕櫚の縄が〔つけられて〕ある」を踏まえた表現。

108) ベイルート版[283頁]及びL写本の表記「iqn-hā sumāt-hā」に基づき、訳出した。結婚を求められた女性について「彼女の許しはその沈黙である」との慣用句を踏まえた表現。

109) iṣfā. 「千枚通し」という意味の語だが、皮革の加工時に革に穴を開けて紐や糸を通すのに用いるものであるため「縫い留める」という動詞との整合性を考え「大針」と訳した。

110) ālat al-mu‘āmalā.

111) al-mīzān.

112) 「最後の審判の日に天秤が傾く者」とは、最後の審判において善行の方が多いと評価される者のことである。

113) 重量をごまかさず買い手に誠実に量る者の意。

114) al-qistās al-mustaqīm. 『クルアーン』17章35節「目方をかける時には正しい秤りを使うよう」を踏まえた表現。

115) 金星はてんびん座の司星(支配する惑星、守護星)。「宮」(burġ)は黄道を12等分した各分(黄道十二宮)のことで、第7宮にあたる天秤宮は181度から210度の30度を占める[堀内勝2012:490頁]。

116) al-muṣṭarī. 木星。「商取引を行う者、献身する者、贖う者」の意も有する。

117) bayt. 黄道十二宮をさらに5分割した約6度ずつの単位である「領域」を示す。ḥaddの語が充てられることもある[“horoscope,” EI; 堀内勝2010:319頁]。

から下りたのを見たのであるから<sup>118)</sup>。[txt. 321; ms. 139a]

### 枱<sup>119)</sup>

枱は、その口を開けば、正しいことを言っていると信用される。人々は枱を尊重する。〔枱で量れば〕信用されるものしか残らない。人々は、とても正確な枱の裁定に依拠する。枱がその値を明言し、唇を閉ざせば、「お見事」と言われる。値が明確になって、枱の持ち主が計量に熟達していたので。クルアーンが命じることの一つは、枱の目盛り (qist) によって正しく計ることであり<sup>120)</sup>、イスラームの教えがそれによって正しくあるものの一つは、枱の定め (šart) による。物差しと天秤は、枱と交換することはできない。両者のどちらも、ムッド<sup>121)</sup>もナスィーフ<sup>122)</sup>も計れない。

### 物差し<sup>123)</sup>

計測は物差しがあることで正しく為され、布地は物差しによって値付けされる。人々は物差しがあることで満足して取引する。〔物差しとは、〕目盛りを施された天秤〔のようなもの〕である。それは、いくつもの錘を必要とせず、重い方に傾くこともなく、真実に至るために吊り下げる必要もなく、正しい判定をするために目をこらさなくてもよい。物差しによって面積が確定され、その広がりが見らくなる。物差しによって、従われる境界が定められる。〔獅子の〕前肢の西没<sup>124)</sup>は物差しによって定まり、昂は掌尺 (šibr) では測れず、ふたご座は指尺 (iṣb') では測れない。〔腕尺 (dirā') でなければ測れない。〕

### はさみ<sup>125)</sup>

続いて、ここで、はさみが述べられる。それは、人がしばしば手に馴染ませて、切るものであり、労をいとわなければ、それぞれに1ディルハムであれ手に入り、それで納得するものである。〔はさみは、〕一つの身体を持つ二つの魂であり、妬みのない一つの心を持つ二人である。はさみが〔口を開けて〕叫ぶたびに、離れた〔はさみの〕半身のそれぞれが合わさって〔ものを切り裂く〕雷撃になる。はさみは、人々のなかで両膝をつき、そして、确实

118) 『クルアーン』55章7節「〔情け深い神は〕蒼穹はこれを高々と持ち上げ、〔正邪の〕秤を設け給うた」及び57章25節「我らは（中略）彼ら（使徒）につけて啓典を下し、秤を下してやった」を踏まえた表現か。

119) al-kayl.

120) 『クルアーン』17章35節に「また、お前たちが計量する時には、量目を十分にし、正しい秤 (al-qistās al-mustaqīm) で量れ。それは〔来世の〕結末としてより良く、優れている」とある。

121) mudd. 穀物を計量する単位。容積は地域によって異なり、例えばバグダードでは1と3分の1パイント (pint) に相当 [Lane: 2697]。乾量の単位としての1パイントは約0.57リットル。

122) naṣīf. 穀物を計る単位 [Hava: 775]。

123) al-dirā'. 「腕」の意。ズィラーはキュービットに相当する長さの単位も意味する [Hava: 227]。

124) naw' al-dirā'. 「西没」(naw') とは、星座の黄道28宿の星が、日の出の時刻に西空に沈んでいくこと [前嶋信次1975: 268頁; 堀内勝2010: 326頁]。「前肢の西没」(naw' al-dirā') とは、当時のしし座の前肢に当たる星が、1月初旬に西没することを指す [前嶋信次1975: 275頁; 堀内勝2010: 272頁]。当時のしし座の前肢には、現在のふたご座のα星カストル (Castor) とβ星ポルクス (Pollux) の2星が当てられ、「両前肢」(al-dirā' ayn) とも言われた [堀内勝2010: 275頁]。

125) al-miqāṣ.

に切断するのである。[txt. 322]

## 第7項 楽器<sup>126)</sup>

### タンバリン<sup>127)</sup>

彼はタンバリンを叩いた。タンバリンは、叩かれると、美しく〔響いて〕、一群の情感をもたらしした。タンバリンは、その<sup>128)</sup>月の光輪を〔ms. 139b〕太陽に負わせ、現れて、その美しさで目を眩まし眩惑した。彼が〔音を〕合わせ (inḍimām) ながらタンバリンを叩き始めると、タンバリンが〔音を〕揃え、その完全さによって〔他の〕楽器類全ての不完全さを明らかにした。

### シャッバーバ<sup>129)</sup>

彼は、その血色の悪さ (šuhūb) が明らかで、悲嘆に暮れていること (naḥīb) が明瞭な、黄色いやつれた女性<sup>130)</sup>を愛し続けた<sup>131)</sup>。〔シャッバーバは〕その内部で風が音を鳴らして吹き抜ける管である。シャッバーバの孔が塞がれると、怠惰な男 (munḥirr) も〔兵士の如く〕奮い立つ。シャッバーバを槍のように持つ者 (rammāḥ) は、柄 (qaṣab) を持つてはいても、なまくらな存在 (kall) であるが。シャッバーバを握る指先は王とみなされる。というのは、シャッバーバは彼がかぶる王冠だからである。大樹を吹き抜ける風の音 (hafīf al-dawḥ) はシャッバーバから学びたいと願い、シャッバーバのそばにいた物言わぬ列席者たちは「我らが黙していても、愛情 (hawā) は語る」と言う。その演奏者 (mulhī) はシャッバーバによって楽しみをもたらし、引き起こす。そして、愛する女性を描写するためにその情感の力を借りた。それゆえ、彼が恋人について語ると、「彼は愛の詩を詠み上げた (šabbaba)」と言われた。

### ウード<sup>132)</sup>

〔それは以下のような〕楽器である。熟練した者のみが奏でることができ、胸と首〔にあたる部分〕しかない。弦が張られると〔人々を〕楽しませ、〔演奏者の〕手の中に捕らえら

126) ālat al-ṭarab.

127) al-duff.

128) 校訂本では m-n-m-h と綴られているが、バイルート版 [285頁] および L 写本などに従って、min-hu と読んだ。

129) al-šabbāba. ヨーロッパのフルートに相当する笛のうち、小さい形状のものを指す。主に葦で作られる。なお、イスラーム世界東部では、「葦」を意味するペルシア語である nāy という名称が一般的であった [Farmer 1929: 500-502]。

130) nāḥila šafrā'. アラビア語で「黄色」は「血色の悪さ」を表しており、ここではシャッバーバの表面の色が黄色いことに掛けている。

131) lam yazal yahwā. yahwā の語根 h-w-y には、「愛する」という意味と「〔風が〕吹く」という意味がある。ここでは、この動詞を使用することによって「シャッバーバのような外見をした女性を愛する」と「シャッバーバを吹く」という二重の意味を持たせている、と考えられる。

132) al-'ūd. ヨーロッパのリユートに相当する撥弦楽器。イスラーム世界各地で広く使用され、最も重要な楽器の一つとされた。胴と首の部分の木で作られるため、「木」を意味する「'ūd」と呼ばれた [“'ūd,” EI2]。

れた状態で〔音が〕放たれる。あたかもウードが大樹の中で育っていたときに、鳩がその声を教えたかのように。〔鳩は〕声をウードに投げかけ、ウードはそれを嘆きから歌へと移し変えた。戦場の如きところにいつつ、どれほど楽しみ場を設けたであろうか。拘束 (taqyīd) と打擲 (darb) を受けながら若木のように動き、喜ばせつつ、どれほど情感を与えただろうか。ウードなのだから、芳香を放ったとしても、驚くに値しない<sup>133)</sup>。[txt. 323] ラバーブ<sup>134)</sup>

ラバーブを奏でると、恋人たち (ḥabā'ib) と共にいた時代とあの娘たち (rabā'ib) と共にいた日々を思い出した。恋人たちへ〔の思いに〕心揺さぶられ、ザイナブ (Zaynab) とラバーブ (al-Rabāb)<sup>135)</sup>に心打たれる。繰り返されるその音色は素晴らしく、彼の鉄の心は柔らかくなる。それによって楽しみ時間に輝き (šāriqa) が現われ、ワインの杯を〔重ねるよう〕促される。[ms. 140a] 雲 (rabāb) に閃き (bāriqa) が生じることは驚くに値しない。トウンブール<sup>136)</sup>

〔それは以下のような〕楽器である。もしそれがなければ、高い評価 (nafāq) がダナーニール<sup>137)</sup>に生まれることはなかったであろうし、その高い評価が命令書 (dustūr al-dasātīr) に含まれる際に、その情感〔を生み出す演奏〕を必要とすることもなかったであろう。〔トウンブールによって〕全ては調和し、あらゆる情感がトウンブールの中で生まれ、まとまって一つのものになった。

#### ジャンク<sup>138)</sup>

それは新しい楽器である。それは、首が長くて、香りの良いジャンクを含む。それは作り出されると情感を生み出した。アジャムの人々は、ジャンクのうちアラブの人々には知られ

133) 'ūdには単なる「木」や楽器名としての「ウード」の他に、「沈香」という意味もある。

134) al-rabāb. ヨーロッパのヴィオールに相当する、弓を使って奏でる擦弦楽器の一つ。七つの異なる形状の種類が存在する [“rabāb,” EI2]。

135) 共に女性の名前であり、ここでは恋人の名前の一般的な例として挙げられている。なお、「ザイナブ」と「ラバーブ」という名前を持つ歴史上有名な人物として、前者にはシーア派初代イマーム＝アリーとファーティマの長女でありフサインの姉妹にあたる Zaynab bt. 'Alī b. Abī Ṭālib (62/682年没)、後者にはフサインの妻にあたる al-Rabāb bt. Imri' al-Qays (62/681-82年没)がいる。双方ともカルバラー事件の際に現場におり、ウマイヤ朝の捕虜となって、ダマスカスに連行された。前者はウマイヤ朝カリフ＝ヤズィード1世を批判する演説を行ったことで、後者はフサインのために哀悼詩を作ったことで知られる [A'lām, v. 3: 13, 66-67]。ここでは、「ラバーブ」という楽器にかけて同名の女性を挙げるにあたり、その対になる存在として、同じくフサインと深い関係にあった女性の名前「ザイナブ」を使用したと考えられる。

136) al-tunbūr. バンドーラのように、首の長い形状をした弦楽器全般を指す。ウードとの違いとして、胴部分がより小さく、首部分がより長いことが挙げられる。イスラーム期以降のイランでは、かなり早い段階で最も人気のある楽器になり、900年頃までにはアラブの人々の間でもウードの優位性が脅かされるほどの人気を集めるようになった [“tunbūr,” EI2]。

137) Danānīr. バルマク家のヤフヤー・ブン・ハーリドによって購入された女奴隷で、歌手として有名 (210/825年没)。その歌声によって、ハールーン・ラシードやその取り巻きの者たちを驚嘆させたという逸話が残されている [A'lām, v. 2: 341; Sawa 2019: 132, 214]。

138) al-ḡank. 「堅琴」や「リュート」などの弦楽器を指すペルシア語 čang の借用語 [研究篇: 292頁]。

ていなかったものを独占した。〔ただし、アラブの人々にとっても〕おおよそ理解することは可能で、そのジャンクがアジャムなしでも楽しさの分け前 (sahm) に結び付けられる〔種類である〕場合のみ<sup>139)</sup>、その分け前が得られる。

---

139) 本文で示した訳文は、アラブの人々がジャンクを楽しめるのは「アジャムの人々に教わらずとも、アラブの人々が演奏して楽しめる種類のジャンクである場合のみ」である、という解釈に基づいている。しかし、この箇所は、「アジャムのいないときにジャンクが矢 (sahm) に結び付けられる場合のみ」と訳すことも可能である。その場合、アラブの人々は、アジャムの人々による正しいやり方ではなく、我流で演奏したときにその音色を楽しむことができた、といった意味になると考えられる。なお、「結び付けられる」と訳した単語 (muttaṣal) を muttaṣil と読むと、ラバープのような擦弦楽器から得られる「長い音」を意味する音楽の専門用語になる [“rabāb,” EI2]。これを踏まえると、当時のアラブの人々が本来は撥弦楽器であるジャンクをラバープのように弓を使って演奏した、ということを表しているのかも知れない。

## 参考文献および略称

### 『高貴なる用語の解説』 活字本

al-ʿUmarī, Šihāb al-Dīn Aḥmad b. Yaḥyā b. Faḍl Allāh. *al-Taʿrīf bi-al-muṣṭalaḥ al-šarīf*. (『高貴なる用語』)

校訂: *al-Taʿrīf bi-al-muṣṭalaḥ al-šarīf l-Ibn Faḍl Allāh al-ʿUmarī*. (Vol. 2 of *A Critical Edition of and Study on Ibn Faḍl Allāh's Manual of Secretaryship "al-Taʿrīf bi'l-muṣṭalaḥ al-sharīf."*)  
Ed. Samir al-Droubi. al-Karak: Mu'ta University, 1992.

ペイルート版: *al-Taʿrīf bi-al-muṣṭalaḥ al-šarīf*. Ed. Muḥammad Ḥusayn Šams al-Dīn. Bayrūt: Dār al-Kutub al-ʿIlmīya, 1988.

### 『高貴なる用語の解説』 写本

B: Ms. 8639. Deutsche Staatsbibliothek, Berlin.

D1: Ms. Adab 57. Dār al-Kutub al-Miṣrīya, al-Qāhira.

D2: Ms. Adab 2134. Dār al-Kutub al-Miṣrīya, al-Qāhira.

F: Ms. Arabe 5872. Bibliothéque Nationale, Paris.

L: Ms. 659. Karl Marx Universität, Leipzig. (底本)

Ld: Ms. Or. 352. Universiteit Leiden, Leiden.

S1: Ms. Árabe 1639. Real Biblioteca del Monasterio, Escorial.

S2: Ms. Árabe 1640. Real Biblioteca del Monasterio, Escorial.

Sh: Ms. Add. 7466 Rich. British Library, London.

### 『高貴なる用語の解説』 訳注

訳注 (1): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注 (1)」『史窓』 67号 (2010年): 27-65頁.

訳注 (2): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注 (2)」『史窓』 68号 (2011年): 51-94頁.

訳注 (3): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注 (3)」『史窓』 69号 (2012年): 19-53頁.

訳注 (4): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注 (4)」『史窓』 70号 (2013年): 31-49頁.

訳注 (5): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注 (5)」『史窓』 71号 (2014年): 1-24頁.

訳注 (6): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注 (6)」『史窓』 72号 (2015年): 63-79頁.

訳注 (7): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注 (7)」『史窓』 74号 (2017年): 1-25頁.

訳注 (8): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注 (8)」『史窓』 75号 (2018年): 23-44頁.

訳注 (9): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注 (9)」『史窓』 76号 (2019年): 21-51頁.

訳注 (10): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注 (10)」『史窓』 77号 (2020年): 25-45頁.

訳注 (11): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注 (11)」『史窓』 78号 (2021年): 115-145頁.

訳注 (12) : 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注 (12)」『史窓』79号 (2022年) : 21-50頁。

訳注 (13) : 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注 (13)」『史窓』80号 (2023年) : 45-61頁。

### 辞典類

岩波イスラーム辞典 : 大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』岩波書店, 2002年。

*A'lām*: al-Zirikī, Ḥayr al-Dīn. *al-A'lām*. 17th ed. 8vols. Bayrūt: Dār al-'Ilm li-l-Malāyīn, 2007.

*Dozy*: Dozy, Reinhart Pieter Anne. *Supplément aux dictionnaires arabes*. 2vols. Leyde: E. J. Brill, 1881. Beyrouth: Librairie du Liban, 1981.

*Hava*: Hava, J. G. *Al-Faraid*. 1899. Beirut: Dār al-Mašriq, 1982.

*Kazimirski*: Kazimirski, Biberstein. *Dictionnaire arabe-français*. 2vols. Paris: Maisonneuve, 1860. Beyrouth: Librairie du Liban, n. d.

*Lane*: Lane, Edward William. *Arabic-English Lexicon*. 8vols. London, 1863-1893. Revised ed. 2vols. 1984. Cambridge: The Islamic Texts Society, 2003.

EI2: Gibb, Hamilton Alexander Rosskeen, et al., eds. *Encyclopaedia of Islam*. New edition. 12vols. and index volume. Leiden: Brill, 1960-2009.

EI3: Gaborieau, Marc, et al., eds. *Encyclopaedia of Islam, Three*. Leiden: Brill, 2007-.

EI: Yarshater, Ehsan ed. *Encyclopaedia Iranica*. 15vols. to date. London: Routledge & Kegan Paul, 1982-.

### 史料・史料訳注

クルアーン (井筒訳) : 『コーラン』井筒俊彦訳, 改版, 全3冊, 岩波書店〈岩波文庫〉, 1964年。

クルアーン (中田ほか訳) : 『日亜対訳クルアーン』中田香織・下村佳州紀訳, 中田考監修, 作品社, 2014年。

クルアーン (藤本ほか訳) : 『コーラン』藤本勝次ほか訳, 全2冊, 中央公論新社〈中公クラシックス〉, 2002年。

クルアーン (三田訳) : 『日亜対訳・注解 聖クルアーン』[三田了一訳], 改訂版, 日本ムスリム協会, 1982年。

アルファフリー : イブン・アッティクタカー『アルファフリー』池田修・岡本久美子訳, 全2巻, 平凡社〈東洋文庫〉, 2004年。

*Buldān*: al-Ḥamawī, Šihāb al-Dīn Yāqūt b. 'Abd Allāh. *Mu'ğam al-buldān*. Ed. F. Wüstenfeld. 6vols. Leipzig: Der deutschen morgenländischen Gesellschaft, 1866-1873. Tehrān, 1965.

*Šubḥ*: al-Qalqašandī, Šihāb al-Dīn Aḥmad b. 'Alī. *Šubḥ al-a'sā fi šinā'at al-inšā'*. 14 vols. al-Qāhira, 1913-1920. al-Qāhira: Wizārat al-Ṭāqāfa wa al-Iršād al-Qawmī, 1963.

### 研究

石黒大岳「ブルジー・マムルーク朝時代におけるナイル満水祭礼の執行者たち——マカームの登場とその背景に関して——」『オリエント』45巻第1号 (2002年) : 120-141頁。

清水和裕「中世イスラーム世界の黒人奴隷と白人奴隷——〈奴隷購入の書〉を通して——」『史淵』146号 (2009年) : 153-184頁。

堀内勝『砂漠の文化——アラブ遊牧民の世界——』教育社〈教育社歴史新書〉, 1979年。

堀内勝『ラクダの文化誌——アラブ家畜文化考——』リプロポート, 1986年。

堀内勝「星と動物——獣帯 (黄道12宮) の牡羊・牡牛・双子—アラブ・イスラーム世界のフォークロア——」『アリーナ』10 (2010年) : 327-261頁。

堀内勝「星と動物 (2) ——獣帯 (黄道12宮) の蟹・獅子・乙女—アラブ・イスラーム世界のフォークロア——」『アリーナ』11 (2011年) : 217-299頁。

堀内勝「星と動物 (3) ——獣帯 (黄道12宮) の天秤・蠍・射手—アラブ・イスラーム世界のフォークロア——」『アリーナ』14 (2012年) : 297-409頁。

堀内勝 『ラクダの跡——アラブ基層文化を求めて——』 第三書館, 2015年.

前嶋信次 『イスラムの蔭に』 (生活の世界歴史7) 河出書房新社, 1975年.

Becker, Carl H. “Le “Ghāshiya” comme emblème de la royauté,” *Centenario della nascita di Michele Amari*. Ed. Enrico Besta et al. Vol. 2. Palermo: Stabilimento Tipografico Virzi, 1910: 148-151.

Dozy, Reinhart Pieter Anne. *Dictionnaire détaillé des noms des vêtements chez les Arabes*. Amsterdam: Jean Müller, 1845.

al-Droubi, Samir. *A Critical Edition of and Study on Ibn Faḍl Allāh’s Manual of Secretaryship “al-Ta’rīf bi’l-muṣṭalah al-sharīf.”* 2vols. al-Karak: Mu’ta University, 1992. (『高貴なる用語』のテキストが収められている第2巻は「校訂」、作品研究の第1巻は「研究篇」と略称。)

Farmer, Henry George. “Meccan Musical Instruments,” *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland* 3 (1929) : 489-505.

Sawa, George Dimitri. *Musical and Socio-Cultural Anecdotes from Kitāb al-Aghānī al-kabīr: Annotated Translations and Commentaries*. Leiden and Boston: Brill, 2019.

Walker, Bethany, J. “Ceramic Evidence for Political Transformations in Early Mamluk Egypt,” *Mamluk Studies Review* 8.1 (2004) : 1-114.